

御意に任す（ピランデルロ）

縣廳に新しく赴任した參事官ボンザの評判が芳しくない。彼は妻を街外れの塔の様な家に閉込め、妻の母のフロオラ夫人に同居を許さず、逢はせさへしないらしい。夫人は街中のアパートに住み、娘の家を訪れては塔の天邊にゐる娘と下の庭から顔を合はせるが、會話もせず、手紙を遣取りする許りだといふ。しかも夫人が近所に住む上司の課長アガジの家に顔出しもしないので、アガジ夫人の方から挨拶に出向くと、ボンザが怖い顔で戸口に現れ、「姑は病氣です」と云つて面會を斷る。アガジ夫妻は憤慨し、夫妻の家族や知合達もアガジ家の客間に集つて、ボンザ一家の異様振りについてあれこれ論つてゐると、フロオラ夫人が現れて婿を許して欲しいと云ふ。

夫人によれば、彼女達は四年前のコルシカ大地震で不幸を嘗め、特にボンザは多くの肉親を失つた衝撃から立直れず、心ならずも無禮な振舞をしたのであり、自分を娘に逢はせないの

も、「妻の心の全部が欲しい」との「激しい愛の氾濫」故の事、自分としては娘の顔が見られれば満足だと云つて歸つて行く。

一同、夫人に同情してゐると、ボンザが現れて云ふ。フロオラ夫人の娘、詰り自分の妻は大震災で死に、その折夫人は發狂した。二年後、自分は再婚したが、後妻を見た夫人が彼女を娘と信じ込み、全身を震はせて笑ひ出した。以來、後妻が夫人の「實の娘だといふ幻影を毀さ」ぬ様に努めてをり、後妻も協力してくれてゐるが、狂人の老女に抱きつかれたら堪るまいから、二人の間を隔ててゐる。

今度はボンザの話に一同納得してゐると、再びフロオラ夫人が登場して云ふ。ボンザが新婚當時、餘りの愛の激しさで屢々娘を死にさうな目に逢はせたので、心配して密かに入院させると、彼は妻が死んだと思込み、絶望のどん底に陥つた。しかも恢復して戻つた娘を別人だと云張り、自分の妻と認めようとしないので、娘を再度結婚させて取繕つたが、彼は妻が亦消えるのを恐れて監禁同様にしてをり、自分は狂氣を裝ひ彼の氣を鎮めてゐる。

一同困惑してゐると、アガジの甥のロオジンがボンザ夫人を呼べば眞實が解る筈だと云ふ。やがて彼女が覆面を被つてやつて來ると、フロオラ夫人は娘の名を叫び、ボンザは後妻の名を

叫ぶ。が、ポンザ夫人に促されて、二人が啜り泣き、勞り合ひながら退場すると、彼女は云ふ、「ああいふ不幸は、そつと手を觸れずに置かねばならぬもの」、自分はフロオラの娘でもありポンザの二度目の妻でもある、詰り「人が信じてくれる、その人間なの」だと冷然と云ひ放つて立去るのである。

二十世紀イタリアを代表する劇作家レイジ・ピランデルロの作品である。彼は二十五年の結婚生活の中、十五年を狂氣の妻と過し、「理由のない嫉妬」で夫を罵倒する妻の狂氣を鎮めるべく、「妻の要求するやうな、もう一人の自分を常に用意してゐなければならぬ」かつたと内村直也が書いてゐる。フロオラ夫人もポンザも互ひの「幻影を毀さ」ずにゐられる限り辛うじて不幸に耐へてゐられた譯であり、「そつと手を觸れずに置かねばならぬ」不幸について語るポンザ夫人の臺詞には作者の萬感の思ひが込められてゐる。然るに、とかく世間は他人の「幻影」ならざる眞實を詮索したがかり、人間に纏はる眞實を容易く擱へられると思ひたがる。その種の輕佻浮薄をピランデルロは激しく憎んだ。作者の代辯者ロオジンが痛烈に皮肉つてゐる、「彼等は眞實が擱へたいといふより、眞實の外側が擱へたいんですよ。目鼻立ちさへはつきりついてゐれば、どんな眞實だつてかまやしない、それで彼等は堪能するんですから！」

（岩田豊雄譯、「ピランデルロ名作集」、白水社）